

ONE LOVE 通信 43号

2010年11月13日発行

今年の夏は暑かったそう。…とっていると冬は目の前。四季のある日本はいろいろと楽しみ、その分思い出も増えていく。ルワンダは申し訳ないくらいに気持ちの良い気候が続けけれど、季節のメリハリが少ない分、なんだか一年が同じようなペースで過ぎていく。「あれをしたのはいつだっけ？」と季節で思い出すことがなかなかできない。でもきっとルワンダ人にはルワンダ人なりの季節感があるんだろうなあ。残念ながら、まだ私はそれを感じることができない。



【ルワンダは遙か彼方】

ルワンダはやっぱり遠いなあ。心の中ではすぐそこにある国なのに、日本ールワンダの飛行機はくたびれた体に結構応える。

ルワンダへ行くのに、よく利用していた航空会社はエミレーツ航空だった。飛行機もきれいだし、サービスも過剰過ぎず、気が楽である。ドバイを経由し、ケニアのナイロビへ。ドバイの空港はさすが金持ちの国だけあって、どうも全体的に「金色」に輝いている（それともこれは単に私の金持ちに対するイメージか？）。ここでいつも私は化粧品を物色する。日本では面倒くさくて、化粧品を探しにわざわざ買い物に出掛けたくないからだ。店に行って「何をお探ですか？」と話しかけられるのも鬱陶しい。だから基礎化粧品はいつも100均だ。しかしドバイではトランジットの時間がたくさんあるので、つついブランド物にも目が行ってしまう。…と言っても所詮私が買うのは20ドル前後の口紅であったり、アイシャドーである。

そんなふうにドバイでのトランジットを楽しんでいた

が、最近ではエミレーツ航空が値上がりし、私にとっては「高級な」航空会社になってしまった。

そこでトルコ航空を使ってみた。成田ーイスタンブールーナイロビという道のりである。イスタンブールではちょうど良い乗り継ぎの便がないため、一泊するらしい。しかもホテル代は航空会社持ちだ。

この頃私は機内食が苦手である。長いこと椅子に座って、お腹もすいていないのに、目の前にど〜んと機内食を出されると、それだけでぐったりしてしまう。だからコンビニのおにぎりや、マクドナルドのハンバーガーを持ち込んで食べる。どうやら機内食に疲れている人は私だけではないらしい。ほのかな海苔の香りやハンバーガーの匂いが機内に漂い始めると、鼻をひくひくさせ「おや？」という表情をする人が必ず数名いる。そして私はその人たちに対して、優越感を感じ、何故か「勝った」という気持ちになってしまうのだ。しかし何に「勝った」のかは全くわからない。一人悦に入り、さりげない顔をしてそれらをほおぼる。我



ながらいやらしい楽しみ方だと思うものの、おにぎりで優越感を味わえるのであれば、神様もそのくらいは許してくれるであろう。そして後はひたすら眠る。

イスタンブールに到着。ホテルが手配されるのを待っている人たち数名。皆、それなりにお疲れの様子である。



イスタンブールの空港で
ポーズを決めるガテラ

バスに乗り込み、連れて行かれたのは、道路沿いにぽつんと建てられたホテル。周りにはレストランが見当たらない。うう、これではホテルのレストランで食べるしかないのか…。大抵こういうホテルは、今一つおいしくないが、値段だけはそれなりに取らせてもらいましょう…という食事だ。これならば機内食を食べておくんだ。

おお、しかし！部屋にはバスタブがあるではないか！私は日本にいる時も、ルワンダにいる時も、面倒だという理由でお風呂に入らず、シャワーのみである。しかしこういうところでバスタブを見ると、俄然張り切ってしまう、並々とお湯を張ってしまうのだ。嗚呼、極楽…。お風呂に入っですっきりしたら、どっと睡魔が襲ってきて、そのまま結局食事にも行かず、朝まで眠ってしまった。

翌日、飛行機は夕方出発である。市内観光をする時間は十分にある。しかし朝食後、またバスタブにお湯を張ってのんびりしてしまった。どうやら温泉と勘違いしてしまったようである。トルコに行ったのに、ケバブも食べず、考えてみれば寂しい初トルコであった…。

そしてそのまま一気にナイロビへ！

ああ、しかしナイロビ到着は夜中の1時だった。ケニア・ルワンダの航空券を持っていなかった私は、ナイロビの空港で買おうと思っていた。運が良ければ、朝8時頃のチケットが手に入るはずだった。しかし珍しく満席。夕方の便しか空いていない。

さあ、どうする？市街に行って、ホテルで身を休めるか、それともこのまま夕方まで空港で時間をつぶすか…。ちなみにナイロビの空港は免税店ももちろんあるが、もう見慣れてしまった、空港ならではの馬鹿高い値段で売られている、いかにも「アフリカに来た旅行者はこういう動物の置物が好きだからな」と、いい加減に作られたようなものばかりである。市街に行くには、タクシーに乗って、ホテル代も払わなくてははいけない。少なくとも50ドルはかかる…。

…と言う訳で、結局ケチな私は空港で約15時間を過ごす手段を選んだのでありました。その長かったことよ。しかも荷物を持っているからトイレに行くこともままならず…。

ナイロビからキガリまでは一時間ちょっとの道のりである。ルワンダのナショナルフラッグキャリアであるルワンダエアは飛行機も小型で、私のお気に入りだ。ここの機内食は大変美味しい。パンは少々バサついているが、サンドイッチが二つ。それと飲み物。



ルワンダエアの機内食。
とってもシンプル。
このくらいのがちょうど
良い。

日本を出てから何時間経ったのか、やっとキガリへ。空港には愛しのガテラが待っていてくれ、その足でエチオピアレストランへ。久しぶりに食べたインジェラ（エチオピアの主食、ちょっと酸っぱい発酵したパンケーキみたいなもの）は、とてもおいしかった。しかし手で食べるので、手についたソースの香りは石鹸で洗ってもなかなか取れず、枕と顔の間にある私の手にこびりついた匂いは、眠りにつこうとする、お腹いっぱい私を悩ませるのでありました。

今回はトップに義足作りとは全く関係のないことを書いてしまいましたが、ルワンダは遠いということを、ぜひ皆さまにもお伝えたく、こんなことを書いてしまいました。お許しくださいませ。

でも義足ももちろん作っておりますので、ご安心ください。



義足を作っている証拠写真。サボってはおりませぬ。

もう一丁証拠写真。巡回診療に行った病院の前で。



【ゴーゴー、職業訓練！】

義足を履いた人たちが自立をするためにはどうしたらよいか？

自立すること＝収入を得ること。何かを作って、それを売る。そこでガテラが思いついたのが、ルワンダ・ブルンジの伝統的な太鼓と、現代の技術をコンビネーションした「オーディオドラム」。

ガテラは少年時代、障害者の施設で、ラジオを作る技術や、家電修理の技術を教わった。それが生かされる時が来たのである！

それを作るために動員されたのは、同じく施設で育った障害者たち。みな、もうすっかり年配である。喧々譁々ののち、出来上がったオーディオドラム。もちろんまだ改善の余地はあるが、アイデアとしてはなかなかのものである。簡単に説明してしまえば、太鼓の中に、ラジオを内蔵させたものだ。ラジオも聞ける、太鼓としても叩ける（少々音は悪いが）、インテリアとしてもバッチリだ！

ルワンダの人たちは、昔からお祝い事があると太鼓叩きを呼んでお祭りをする。例えば結婚式や生まれた子供に牛をプレゼントする時などに。だから太鼓の音には子供の頃から親しんでいる。



ちょっとした工夫から、新しいものが生まれるということを実感。

しかしその太鼓は、太鼓叩きのものであって、一般の家庭に置かれているものではない。

またルワンダの人たちはラジオによっていろいろなニュースを知る。テレビや新聞は、特に田舎の人たちにとってはなじみが少ない。しかしどこに行っても良く目にする光景は、ポータブルラジオに耳をびったりくっつけ、熱心にニュースを聞いている姿である。ルワンダや世界のニュースはもちろん、家族や友人が死亡したという情報もラジオから得る。

そんなに親しまれているラジオだったからこそ、1994年の悲しい虐殺もあつという間にルワンダの人々の間に

広がってしまった。「ツチ族を抹殺せよ」というプロパガンダがラジオから流され、それに翻弄されてしまった人たち。

そんなルワンダの人の身近にある二つの物を融合し、一つの品物が出来上がった。太鼓叩きのみが所有していた、しかしルワンダの人たちの耳になじみの深い太鼓も、家庭の中に入れていくことができる。

ある日、ルワンダで芸術作品の展覧会があり、そこにオーディオドラムを出展してみた。おお！なんと！銅賞をゲットした！銅メダルと賞金6万円！やったぜ！



展覧会にオーディオドラムを出展。自慢げに披露するガテラ。

このオーディオドラム、ブルンジの大統領が非常に気に入ってくれて（ブルンジの大統領は私が日本滞在中に、義肢製作所を訪ねていただきました）、何と一気に50台の注文。ありがとうございます。友人や政府の人たちにプレゼントするそう。

賞をもらい、ブルンジ大統領にも気に入ってもらえたということもあり、ガテラやそれを作る障害者も俄然ハッスル。質とデザインの向上を目指して、これからもワンラブの障害者はずんずん進んでいくのである。ちなみに今はCDドラムの試作中。

皆さま、応援よろしくお願いします！そしてオーディオドラムにご興味のある方は、ご連絡ください！



ルワンダ事務所代表ガテラより

【発展とは？】

発展って、一体何だろう？

高層ビルを建てること？

あつという間に、世界のあちこちに旅行ができること？

遠く離れた人の顔を見ながら、おしゃべりすること？

世界中の情報を、その場に居ながら収集できること？

No No No

それらは発展には違いないけれど、もっと大切なことがある。

本当に国の発展を望むのであれば、まず弱者の声を聞き取ってほしい。一人一人の国民が、不安のない生活を送ることができて初めて、国が発展したと言えるのではないかな？

この世界には、お腹をすかせた子供たちがたくさんいる。勉強したくても学校に行けない子供たちもいる。病気になっても、治療を受けることができずに死んでいく人たちがいる。

大虐殺後のルワンダは、16年の間に目覚ましい発展を遂げてきた。

銃撃の痕のあった建物は、新しく建て替えられ、道路もきれいに舗装されている。

当時死臭の漂っていた虐殺の跡地である教会や学校も、今ではきれいに整理され、その時のことを覚えていない、あるいは知らない若い外国人旅行者が訪れている。

町の発展と村の発展のスピードには差があるけれど、この16年間、ルワンダ国民は国の発展に力を注いできた。

それぞれが歴史の一部である。

あの頃と比べて、人々の暮らしは豊かになったのだろうか？

一人でも多くの子供が、充分にごはんを食べ、教育が受けられるような、病んでいる人たちが、お金の心配をすることなく病気を治せるような、そんな国になってほしい。

そしてそれはルワンダだけではなく、世界中のどの国もがそんなふうになるように、今、自分ができることを考え続けたい。

【大統領選挙も終わって】

この7月と8月、ルワンダ・ブルンジの大統領選挙が終わった。両国とも、今迄の大統領が再選した。

初めてこの二つの国を訪れたのは1990年。もう20年前にもなる。その間、ルワンダでは歴史にも残ってしまう悲劇が起き、ブルンジも同様に、政治的な背景から引き起こされた民族対立によって、ルワンダと同じくらいの人々が命を失っているという。私は政治のことは良くわからない。それでもこれらの国で生きていくためには、どうしても政治に無関心ではやっていけない。



大統領選挙の時に貼られた、カガメ氏のポスター。特大サイズであります。

目覚ましい発展を遂げてきているルワンダ、その努力を認めたがらない人があるのも事実である。つまり「出る杭は打たれる」方式で、力をつけてきているルワンダに嫉妬する人たちである。それはルワンダ人であり、今までルワンダを支配してきた諸外国である。

以前書いたかもしれないが、ルワンダが大虐殺後、ここまで発展できたのは、カガメ大統領がいたからだと思う。自分の国で生活ができないという状況を、身をもって体験し、だからこそ余計に国に戻ることに、そして再建することに力を注いできたというのは、間違いのない事実である。

最近では彼のことを「独裁者」と呼ぶ人たちもいる。しかし思うに、一国を率いる人間は、ある程度独裁者で良いのではないかと感じるのである。強い意志を持っていなければ、国を率いることなどできるはずがない。もちろんそれが汚職や国の腐敗につながるのであれば、許しがたい。でも彼の場合、国の治安を守るため、発展のため、身を粉にしてきた。「強気な大統領」と呼ばれながらも、先進国に媚を売らずにルワンダを作ってきた。同時期にそれを見ることができた私たちは、彼の苦勞・心勞が痛いほど理解できる。

ルワンダは「アフリカの奇跡」と言われる発展を遂げていて、最近ではそれを取り上げられることも多いが、その反面ルワンダ批判やカガメ批判がある。

いわゆる先進国の人たちやルワンダ国外でルワンダを見つめているルワンダ人が、それらの批判をあちこちにばらまいている。どうやら彼らは、いつまでたってもアフリカが発展することを認めたくないようである。

しかしねえ、発展してきているというのは紛れもない事実だし、素直に彼の功績を認めてもいいんでないの？

嫉妬する前に、まず自分でやってみたら？やってみてから批判をするべし！と思うのであります。

さて、これからのルワンダ・ブルンジ、再選した大統領がいかに国を作っていくか、一緒に歩んでいきたいのであります。



紹介します！ワンラブのスタッフ

【ありがとう、ママジャンティ】

一体何年くらい勤めてくれたのかなあ？気がつけば、私の心の支えになってくれていた。以前、このコラムでも紹介したママジャンティ。

彼女は私たちのプライベートな部屋の掃除から、ゲストハウスの掃除、そして他のスタッフの監視役でもあった。いわゆる「お局」ではあるが、悪い意味のお局さんでは全くない。

そのママジャンティが、この10月にワンラブの仕事を退いた。

以前から体調が思わしくないということは聞いていたが、まだまだ元気だと思っていた。しかしだんだんと年はとっていく。心臓を悪くし、片方の目の視力が落ち、体を酷使する仕事ができなくなってしまった。

ママジャンティは「明治の女性」の強さを持っている。正しいことを愛し、間違ったことにはぴしゃりと意見を言う。だらしない男のスタッフなど一刀両断である。はしたない女性も同様である。私は彼女の立ち振る舞いを見て、ルワンダ女性、否、女性はこうあるべき！と言うのを勉強した。



ありがとう、ママジャンティ。隣は孫とも呼ぶことができる警備のエリック。

ああ、彼女の存在が、私にとってどれだけ大きかったか。部屋の掃除をしてもらっていたので、もちろん物理的に私が掃除をしなければいけなくなったという不便さもある。しかしもっと心の部分で、彼女の不在が身にしみる。

やせっぽちで、抱きつくと骨と皮しか感じられないママジャンティだが、中から出てくるパワーには見習うべきものがあつた。

私が持っていた「ママアフリカ」のイメージは、でっぴりと太っていて、ビールケースなど片手でひょいと持ち上げ、市場で大声で荷売をしているような感じだった。でもママジャンティに出会ってから、私のママアフリカは彼女の姿形にすり替わった。

しかも彼女は優しい。くじけている時に、さり気なく部屋に花を活けてくれたり、疲れてブルンジから戻ってきた夜、ご飯の支度をしないで済むように、特製シチューを作っておいてくれたり。つまり優しさとは、相手に対する思いやり。私もそんな強さと優しさを備えている女性になりたいです。

でもママジャンティ、ときどきワンラブに遊びに来てね。大量にいる猫たちも待っているのである。

隠れてタバコを吸っている姿が、不良女子高生みたいで、なんだかかっこよかったぞ、ママジャンティ。



今号の患者さん

【作れなかった義手】

ブルンジに両腕を失ったフランシネと言う女性がいいます。日本のジャーナリストK氏が、ブルンジで取材中に出会った女性です。

彼女は就寝中に旦那さんによって、両腕を切り落とされてしまいました。旦那さんは政府軍兵士として働いていたのですが、兵士という重い任務のため精神的に病んでしまい、奇行を繰り返すようになってしまったということです。

K氏は彼女のことを記事にしました。その彼女の存在を知った日本人たちが寄付を集めてくれました。その寄付はK氏の手から、ワンラブに渡し、両腕の義手を作ることを約束しました。

でも簡単には事が進まなかった。

ある日、彼女の所属する団体のスタッフがワンラブを訪れ、「フランシネは義手を作ることを望んでいない。だから義手を作らなくてもいいから、その費用をくれ」と言ってきたのです。

私たちは義手義足は作る。でもお金の援助はしていないということを伝えたのですが、どうやら彼女の切り落とされた腕は、その団体にとって「金づる」になると判断してしまったようです。

そしてその後ぱったりと義肢製作所に来なくなりました。私たちも忙しく、彼女の消息のみを追うこともできず、時間が過ぎて行きました。しかしその後、何度かその団体の人たちが、彼女の義手作りのために、資金集めを行っているという噂を耳にしました。

宙ぶらりんになってしまった義手作り。

彼女の居場所を聞き出して（実はものすごく近い場所にいたことが判明）、会いに行きました。

フランシネ・団体の代表・ガテラ・エマーブル・私の5人で話し合ってみると…。

実はイタリアの団体が彼女の義手を作ることを約束してくれた、しかもその義手は電動の義手で、自分の手のように動かすことができる。あとはイタリアまで行く渡航費を集めるだけだ。

ということになっていました。

今、私たちが作れるのは、動かすことはできるけども電動ではない義手。電動の義手は一本100万円以上するらしい。そんな高価な義手を作る予算は、私たちにはありません。また一人の患者さんに対してだけ、それだけの予算を使うこともできません。あくまでもできる限り平等にやっていきたいということを目的としているから。

またたとえ電動義手を作る予算があったとしても、壊れてしまった時に修理ができない。いつかは壊れるものだから、また作り直さなければいけない。

でも自分たちが考えていた義手は、壊れた時に修理ができるようなもの。自国で修理ができるということは、とても大切なことだと思う。壊れるたびにイタリアに行くのは、お金がいくらあっても足りない…。

彼女に壊れてしまった時、あるいは古くなってしまった時に、再度そのイタリアの団体から支援を得られる可能性が低いのではないかということも伝えただけ、彼女は電動義手を作ってもらうことを選んだようです。多分その理由の中には、「高価な」義手が手に入る、イタリアまで作りに行けるなどということも含まれていると思います。壊れてからのこと、再度支援が得られるかどうかということは、今の時点では考えることができないのだと思います。

正直、その団体から継続的に1本100万円以上する（つまり両腕だから200万円）義手の支援を受けられるとは考えにくいです。よほど経済的に余裕のある団体でないと、無理でしょう。

でも私たちには彼女の希望を妨げることはできません。それを望んでいるのであれば、後押しをするのみです。

ただ彼女が今後必要であれば、いつもワンラブはスタンバイをしているということを伝えました。もしもイタリアで義手を作らなくなった、あるいは既に持っている義手の具合が悪くなったら、いつでもワンラブに足を運んでほしい。そう思っています。



少しでも生活しやすくなりますように。

今回、フランシネのために寄付して下さった日本人たちに胸を張って「義手完成！」の報告ができなかったこと、とても悔しく思います。

支援はとても難しい。みんなが善意で集めてくれた資金を、その望み通り使うことができなかった。

でも例えば今回のように、現実を伝えるということも大切なような気がします。

彼女の切断された腕が「金づる」になってしまったこと。もしかしたら彼らは義手義足をもらうよりは、現金をもらえる方が嬉しいのかもしれないということ（しかし私たちは義足屋。これからも義足は作り続けるのである）。異国の地に行くチャンスを探していること、などなど。

今回のことはとても勉強になりました。フランシネ、いつでも必要な時はワンラブに来てね。毎度のセリフだが、ワンラブは不滅なのである。

【お天気雨】

ルワンダではお天気雨のことを「ハイエナの結婚式」と言うそう。何故そう言うのか聞いてみても、誰も良く理由はわからない。どなたか「こんな理由だからじゃない？」とひらめく人がいたら教えてください。





日本事務所より

【またまた引越しご免】

たびたびで申し訳ないのですが、また引越ししました。今までのところから歩いて2分！…とはいうものの、住所が変わりましたので、お知らせします。

〒253-0051

神奈川県茅ヶ崎市若松町12-28-304

*電話番号は変わりません。

【助っ人はいませんか?】

ワンラブが誕生してから15年。その間たくさんの人が手伝ってくれました。ガテラと私がルワンダに行っている間、そんな人たちの力がなければ、ここまで来ることができませんでした。感謝です。

イベントに参加、ワンラブ通信の発行、Webの製作などいろいろなことがあります。助っ人要員を探しております。

「私、こんなことができます!」と言う方、ご連絡くださいまし。

また日本だけでなく、ルワンダやブルンジでもボランティアをしたいという方、お待ちしております。

特にルワンダでは、日本語を話すことのできるスタッフを育成したく、日本語ボランティアを探しています。

また資金を生み出すために運営しているレストラン・ゲストハウスの管理をしてくれる人、募集中です。レストラン・ゲストハウスに関しては、ボランティアと言うよりは、ビジネスとして考えることのできる人、大歓迎です。

【水道管破裂】

ある日、ルワンダの水道局が請求書を持ってきた。その請求書を見てびっくり!なんと10万円以上の請求額。絶対間違っているに違いないと、水道局にだってかかって、何とか安くしてもらったものの、原因を追求したら、水道管が破裂していて、水が漏れていた…。

また修理代にお金がかかってしまう。私がかつくりくるのはこういう時である。人生はつらすぎる…。

注意しながらワンラブ通信の発送を行っておりますが、宛名や住所が違ふ、2通来るなどのことがございましたら、ご連絡ください。

【編集後記】

最近どうも体力の衰えを感じる。仕方がないことと思いつつ、階段を上る足の重さを感じると、一抹の寂しさを覚える。

ありがたいことに、この仕事をするようになってから、一度も大病をしていないし、風邪や食あたりもほとんどない。健康な体に産んでくれた父母に感謝。

しかし年齢的には下り坂。これからどうしても体力は落ちていく。それに勝つためには「気力」が必要。う〜ん、気力の持続と言うのは難しいぞ。

もうちょっとだけ寝てしまおう…と葛藤している私を横目に、ガテラはえいやっと布団を払いのけ、仕事に行くのである。その気力、15年前と全く変わっていない。

彼は常に目標を持っている人です。一つのことが終わると、もう次にやることを考えている。ともすれば、私は何となく流れてやってきてしまっていることも、ガテラは何故それをするか、いつまでにそれを達成するかということを考えながらやっている。

「目標を忘れるな」と常に言われ、最近は仕事を始める前には、できる限りスケジュールを決めてこなしていこうと心がけるようにしている。しかし思ったように進んでいけないのも、これまたアフリカ。

嗚呼、今日もまた寝る前には反省の連続だ。自己嫌悪の日々。

この間、ふと思い出した。父は生前、ルワンダに桜の木を植えたいと言っていた。そのためにいろいろと調べたらしいが、志半ばにして力尽きてしまった。

と言うことは、私とその意志を継がねばならぬ。う〜ん、ワンラブ・ランドの桜が満開なんて、ちょっと素敵ではないか。日本と言えば桜。その桜をルワンダで咲かせましよう。しかしルワンダで花見なんてやってしまった日には、みんな最後までとことん酔っぱらうんだろうなあ…。多少の不安はあるものの、その光景を思い浮かべると楽しくなってくる。

よし、新たな目標発見。どなたか桜の木に詳しい方、いかようにしてルワンダへ持っていくことができるか、あるいは育てることができるかご指導ください。よろしくお願ひします。

【おことわり】

*発送作業の都合上、振込用紙を同封させて頂いておりますが、すべての方に寄付金・会費を催促するものではありません。

*当団体はご提供いただいた個人情報について、皆さまからご同意を頂いた場合や、正当な理由がある場合を除き、第三者に公開、提供することはございません。

書き損じハガキ、テレホンカードは下記、茅ヶ崎事務所までお送りください。ご寄付は下記の口座まで、みなさまのご支援お待ちしております。

※事務の簡素化と経費節約のため、領収書は省略させて頂いております。

必要な場合は、振込用紙の通信欄に「要領収書」とご記入ください。

〒253-0051 茅ヶ崎市若松町12-28-304 Tel: 0467-86-2072/080-6564-4448

e-mail: info@onelove-project.info(日本事務所) onelove@rwanda1.com(ルワンダ事務所)

郵便振替口座: 00210-5-66497

ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

ワンラブ通信 43号 2010年11月

発行: ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

<http://www.onelove-project.info/>

<http://oneloverwanda.blog105.fc2.com/>

<http://www.onelove-project.org/>



One Love
Mulindi Japan One Love Project

